



国際地域学部 国際地域学科
岡本郁子教授

おかもといくこ
1990年上智大学外国語学部卒業、1992年、修士(スタンフォード大学・Food Research)、2006年、博士(京都大学・地域研究)、1992年アジア経済研究所入所。2006～2008年津田塾大学非常勤講師。2014年より現職。

研究とは「驚き」と「発見」の積み重ね。 トラブルや失敗を糧にするしなやかさが大切です。

急速な民主化が進むミャンマーは、世界中からビジネスパーソンや観光客がドッと押し寄せる注目の国。しかし、ブームとは関係なく、閉ざされた時代から長年この地でフィールドワークを積んできた人がいる。

岡本郁子教授。日本では数少ないミャンマー農業経済研究者のひとりである。その素顔と、今まさに“旬”の講義の中身とは？

運命に導かれた ミャンマー研究との出会い

実は、父の仕事の関係で、中学の3年間をミャンマーで暮らした経験があったんです。当時は、社会主義体制でビルマと呼ばれていた頃。本当に貧しくモノがない時代で、うちの両親など、赴任にあたって3年分のトイレットペーパーや文具を日本から持っていったくらいです。首都に暮らしていましたが、車はほとんど走っておらず、家の前には牛がデンと座っているようなところ。豊かな日本と比べれば、天と地ほどの違いでした。

あの3年間の私の原体験となったのでしょうか。大学卒業後は「発展途上国の開発にかかわりたい」と、アジア経済研究所に入所。そしてそこで任命されたのが、何の運命か、ミャンマー担当でした。以来、ミャンマーとは20年以上のおつき合いになります。

経済とは「人」を対象にする学問

専門は、大きく言えば「開発経済学」です。途上国の飢餓や貧困の問題をどう解消するか。そのひとつとして、農村を取り巻く経済メカニズムや問題点を明かすのが私の研究です。なんだか難しく聞こえるかもしれませんが、しかし、経済の研究対象は、結局は「人」。現地へ行って、人と向き合うのが基本です。私自身、ミャンマーへは、2年間の滞りも含め、何度も足を運びました。最初は言葉もままならない。けれど、コミュニケーションしたい気持ちさえあれば、なんとかなるものなんですね。現地の人によれば、今も私のミャンマー語はかなりなまりがあるようですが、そこは愛嬌です(笑)。

米の政策に関する調査をしたかと思えば、小舟に乗って漁村を回りエビ漁の実態調査もした。現在は、森林資源管理の研究も行っています。農業、漁業、林業と範囲は広がりましたが、私の関心はひとつ。それは、「いかに農村の暮らしに豊かさをもたらすか」です。

そんなこれまでの研究成果を、東洋大学では、今期、『国際食料問題論』や『農村地域開発論』などの講義に反映させています。国際地域学部では、これからどんどん現場に出ていこうと意欲に燃える学生がたくさんいます。その前に身につけておきたい基礎概念を、ここでぜひ体系的に学んでほしいと考えています。



岡本教授が何度も訪れたミャンマーの農村

思い通りにならないからこそ面白い

実際現場に行けば、いろいろなハードルが待ち構えています。まず政府機関に調査の許可をとるだけで何ヶ月もかかることもあるし、電気がこない、水が出ないなどというトラブルもある。思い通りにならないことだらけなんです。そんなとき大切なのは、「じゃあ、次の手段は？」とセカンド・ベストを考える柔軟さです。

そもそも計画どおりいかないからこそ、驚きがあり、発見があります。研究とは、その積み重ねなのです。恥をかいてもいい。皆さんには、失敗や想定外のできごとを恐れず、果敢に挑戦してほしいと思います。